

シンガポール対外証券投資のリージョナル・バイアスについて

取越達哉(大和投資信託)

本報告の目的は、シンガポールの対外証券投資、とりわけシェアの高いアジア向け投資を対象に、第一に、どのような特徴を持つか、第二に、そのような特徴を持つ理由は何か、について分析することを通じて、同国の「アジアに関する専門的知識・技術(expertise)」に関する一側面を明らかにすることである。

「どのような特徴を持つか」という点については、(1)「広くアジア・オセアニアへのリージョナル・バイアスを持つ。但し、日本及びオセアニアへの偏りは、相対的に小さい。」、(2)「広くリージョナル・バイアスの低下傾向がみられる。但し、株式・投資ファンド持ち分投資については、低下傾向には歯止めが掛かりつつある。」という、2つの特徴が明らかになる。「そのような特徴を持つ理由は何か」という点について、リージョナル・バイアスとの関係が強いと考えられる「距離」の視点から検討した結果、(1)の特徴については、シンガポールからの距離が大きな役割を果たしている可能性が明らかになる。すなわち、シンガポールからのアジア・オセアニアへの距離が近いこと、ニュージーランド、オーストラリア、日本は、相対的にシンガポールからの距離が遠いこと、がその一因であると考えられる。距離は、過去の先行研究においては、情報の入手し易さの代理変数と解釈される場合が多いことを踏まえると、同国のアジア・オセアニアに対するリージョナル・バイアスは結局、地理的に距離が近いアジア・オセアニア情報の入手し易さの表れであると考えることができる。なお、その場合の情報とは、多様な情報源が発達している現代においてもやはり地理的な距離に依存する情報であり、証券投資理論、とりわけ証券分析の分野において重要性が指摘されてきた「対面接触によって得られる情報」と考えることができる。(2)の特徴については、証券投資において、距離の重要性は低下しているものの、依然として一定の重要性がある可能性が明らかになる。そのことは、株式・投資ファンド持ち分投資、債券投資のいずれについても、時間の経過に連れて、距離に対するリージョナル・バイアスの感応度が低下していること、但し、債券投資に比してリージョナル・バイアスが低い株式・投資ファンド持ち分投資においては、2010年代以降、距離に対するリージョナル・バイアスの感応度の低下に歯止めが掛かりつつあることに表れている。以上から、シンガポールの専門的知識・技術の一つとして、以前に比べやや弱まっているとしても、アジア・オセアニア情報の入手し易さ、その情報を踏まえた分析を挙げることができる。

なお、本報告の内容は、筆者個人の見解に基づくものであり、所属組織の見解を示すものではない。